

研究ノート

日記に見る昭和前期石神大屋齋藤家の生産と生活

An Analysis of Life and Agriculture of Ôya Saitô's Farmhouse at Isigami Hamlet in the early Syôwa Era seen from the Diary

三須田 善暢^{*1}、庄司 知恵子^{*2}
MISUDA Yosinobu, SHÔJI Chieko

Keywords: *Japanese Rural Sociology, Diary Research, Isigami Hamlet*
日本農村社会学, 日記研究, 石神村

1. はじめに

農民日記の研究・紹介は、高田 (2007)、細谷 (2019)、佐藤 (2019) などに見るように、近年活気をおびつつある。数年前から我々が分析・解説を進めている石神大屋齋藤家資料にも、昭和10年代に当主であった齋藤善助氏の日記がある。

周知のように石神齋藤家は、アチックミュージアムから1939 (昭和14) 年に出版された有賀喜左衛門によるモノグラフ『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』(有賀 (1967) に再録) の調査対象である。有賀は、このモノグラフを重要な素材の一つとして自己の同族団理論を確立させた。

齋藤善助日記は、一般的な農事日誌という性格が強く、執筆者の意識・感情の面までは十分には分からない。しかし、当時の農家経営や名子らとの関係の一端を垣間見ることができる。

そこで今回、有賀が調査に入った1935 (昭和10) 年前後の日記の一部からみいだせる特徴を明らかにし、有賀のモノグラフ調査と比較して、大屋齋藤家の生産・生活の特徴を描いてみたい。全ての日記に関する分析は別稿を期したい。

2. 日記の概要と石神および齋藤家の紹介

2.1 日記概要

現在発見されているのは1909 (明治42) 年、1914 (大正3) 年 - 1926 (大正15) 年、1930 (昭和5)、1932 (昭和7)、1934 (昭和9)、1937 (昭和12) - 1940 (昭和15) 年の計20冊である。博文館販売の当時の当用日記でありB6くらいのサイズである。本稿では、昭和に入ってから最初の日記の1930年と、漆器業を廃業した翌年の1940年のものを紹介する。

日記の記述は、最初は天候、温度 (華氏で記述) を記載し、その日の出来事を書いている。きた人、仕事を頼んだ人や作業内容の場合もある。左側には、たとえば「末太郎/木地挽金次郎、重三」というように、別扱いで氏名と作業が書かれている。齋藤家にきて一日作業をした人物の氏名と思われる。

2.2 石神と齋藤家の説明

以下有賀 (1967) を参考に、石神、齋藤家の成員などの紹介をしておく。

齋藤善助氏 (1886 (明治19) - 1959 (昭和34) 年) は第17代大屋齋藤家の当主であり、福岡中学校 (当時) に一期生で入学し、中退後農業・漆器問屋等を営んでいた。

1934 (昭和9) 年9月時点の齋藤家成員を列挙する。血族は、当主善助 (49歳、以下同様)、母フミ (72)、妻コト (45)、長男文一 (25)、嫁ハナ (21)、二男方男 (13)、三男安道 (10)、四男文男 (9)、五男善弥 (5)、長女トク (21:嫁出)、二女トモ (18:1935年に婚出)、三女正子 (6)、孫訓子 (2)、姉ミン (52)。同居の召使は、齋藤勇吉 (26)、妻セツ (24)、長男勇悦 (5)、長女イセ (3)、二女イネ (1); 山本倉松 (54)、養子鉄三 (28:山本兼松二男)、嫁ヤエ (23); 服部イシノ (18:1935年に婚出)、服部マサ (15:1935年に他出); 橋本キヨ (57:1935年に他出)、甥石松 (11:1935年に他出); 橋本サキ (49:1935年に他出)。

当時の齋藤家の手作耕地は田約1町3反、畑約2町であった。

3. 1930 (昭和5) 年の日記から

3.1 登場人物・回数・場所・細目

登場人物は、総計でおおよそ250人ほどであり、130人ほどが1回だけの登場、40人ほどが2回の登場である。頻繁に出てくる作業については細目を作り集計してみた^①。「木地挽」(186回)、「養蚕・桑」(84回)、「馬」(69回)、「草刈・萩刈」(62回)、「漆器関係」(55回)、「田/稲作」(35回)、「薪」(34回)、「炭」(29回)である^②。こうした担当は、だいたい特定人物に決まっている。特に「木地挽」は金次郎[14:名子]と重三[29:名子]^③の2人がほとんどおこなっている。召使の勇吉と同じく召使の鉄三[41]は養蚕・桑と漆器、召使の倉松[40]は馬、鉄五郎[16:名子]は農業全般である。

登場する場所は、石神内かもしくは近隣の村が多い。荒屋新町がやや遠く、少し遠いと浄法寺、花輪である。富山の薬売りもきている。

3.2 具体的な事例

*1 国際文化学科 *2 社会福祉学部

以下、項目ごとに、日記の記述を適宜紹介していく。記述は必ずしも日記の記載通りではない。■は不明箇所、[]は著者がおぎなつた箇所、文後の（ ）は月日を示す。

【田／稲作】

鉄五郎が田のクヘ[クイ]集めする(4/9)。鉄五郎は朝に種籾をつける(4/13)。女どもは苗代の草取り(4/19)。苗代かき(4/25)。苗代ならし(4/29)。稲の種播(4/30)。田カキする(6/4)。田植(6/9)。村の名子・作子と共に田植(6/10)。稲刈り頼む(10/10)。名子一同で稲仁王取りする(10/14)。鉄五郎、孫市、武蔵、重治等にて籾おしする(10/19)。若者共は種籾上げする(10/31)。村一同に頼んで籾上げする(11/1)。鉄五郎は種籾の準備をする(12/2)。籾扱する(12/3,16)。松太郎、ヤエ、スエは籾扱する(12/19)。鉄五郎、松太郎は土引(苗代へ)(12/20,21,25,30)。鉄五郎は土引(苗代へ)(12/26)。松太郎は苗代土引きする(12/27,31)。

稲の作業は、相対的にあまり多くはなく、鉄五郎が中心である。名子一同での作業も「田植」や「稲仁王取り」「籾上げ」などでおこなっている。

【馬】

農林省から見雪号の牝馬奨励金を50円受け取る(4/16)。松太郎の馬が生まれる(栗毛牝馬)(4/18)。鉄三は馬を放す(4/23,24)。種馬所種付検査へ行く(4/29)。今夜第二玉柳より栗毛牝馬産まれる(5/1)。鉄三が田代平へ種付に行く(5/2)。孫蔵方の牝馬より牝馬産まれる(5/6)。第二松風号より栗毛牝馬産まれる(5/9)。鉄三は岩花号へ種付けに行く(5/15)。夕方駒吉馬栗毛牝馬分娩する(5/22)。種馬所の成績検査(5/28)。善助、福岡の産馬会へいく(6/6)。鉄三は杉風号へ種付する。馬之助が馬に種付に行く(6/13)。三ヶ田より馬が来る(6/15)。文一・鉄三が見雪号の種付けのため、沼宮内種付所へいく(7/5)。産馬畜産議員の選挙。田山選挙区から善助を含めて4名当選、2名落選(7/6)。倉松、見雪号の放牧に行く(7/14)。末太郎・鉄三が見雪号の種付けに行く(7/24)。鉄五郎、辰治は田代へ馬の糞さらいに行く(8/29)。文一、沼宮内の馬匹品評会へ行く。浄法寺の川又へ里少駿牡百円で売る(9/20)。善助、浄法寺の馬匹品評会へいく(9/27,28)。品評会での授賞式があり、清明号が3等賞、第七松風号が4等賞を授賞(9/29)。鉄三・倉松が二歳雑駒を福岡へ連れて行く。福岡泊まり(10/1)。小山田清太郎へ2歳牝馬を売る(39円50銭)(10/29)。

以上のように、馬の記述は漆器・木地と同じくらい多い。記述に見られるように、政府が推奨していたことが分かる。馬は名子らに飼養させていたようである。さらに、各種の関連団体に参加していて、福岡などへ出かけている。

【牛その他】

学校で畜産講話あり(2/2)。松太郎、本日より牛方する(5/23)。赤駿牝牛を浄法寺の田口■太郎へ135円で売る(6/1)。金

作より3歳の牝牛を58円で購入(6/19)。酒屋の牛も借りて木地形付けする(7/3)。牛は酒屋の牛と共に門崎より籾上げする。門崎の作子と共に3回負う。馬は前田より籾上げする。五日市よりも作子が馬にて付来る(11/7)。

牛と馬両方を農業に使っている。牛を借りて「木地形付」をするとはどういうことであろうか。

鳥小屋を造る(6/1)。名古屋から雛105羽来る(6/15)。米国鱈を養う。文一は浄法寺小田嶋五郎氏へいき、来鱈を貰いに行く。500尾を貰う(6/11)。鯉が少し産卵する(6/13)。

鳥小屋で鶏を飼ったり、名古屋から購入したり、魚の養殖をしたりと、幅広く多様なことをしている。

【養蚕・桑】

役場より桑木150本来る(4/14)。電気を蚕室につける(5/31)。養蚕室へカナリヤ・電照灯をつける(6/3)。勇吉が桑取する(6/4)。末太郎、勇吉、桑のとり入れ(6/6)。勇吉が午前中桑取、午後駒ヶ嶺に桑注文に行き、手金20円を置いてくる(6/7)。勇吉は駒ヶ嶺へ桑買いに行く(6/25)。桑切と桑買い(6/26)。少し上簇をする(6/27)。名子一同を頼んでまぶし折り及びひき拾ひする(6/28)。蚕の上簇をすます(6/29)。女どもは繭かきをする(7/5)。繭商人くる(7/6)。勇吉・鉄三繭市場へ行く(7/9)。七戸の種屋より種来る(7/17)。夏蚕搦立する(7/19)。和子・トク共に生糸取をする(8/19・20)。善助役場へ桑園改良の件で行く(12/28)。

駒ヶ嶺へ桑を注文に行き、その後も桑を買ったとの記述があり、自家では桑は足りなかったのであろう。また、役場からも桑の木を取り寄せたり、桑園の相談にいったりと、役場との関係は強い。名子一同に、まぶし折・ひき拾ひ(=蚕が透明になってきたものを「ひきた」と言い、それを集めて簇にかけること)を依頼している。繭かきや生糸取りは女性の仕事である。

【漆器・木地関係】

室にて塗り物の荷造りをする(1/1)。中新田営林署技手・清水石文伍氏、木地や漆の視察に来る。せう、ヤエ、室へ御椀とき(3/15)。盛岡の塗物を三太郎が新町まで運ぶ(3/30)。久昌寺の注文塗物持参する(3/31)。塗物京都より届く(4/19)。物産共進会へ■塗汁椀十個客車便にて送る。京都谷川へ見本の塗物3■送る(4/21)。勇吉漆の実作りをする(4/22)。谷川より塗物来る(5/30)。末太郎、田山へ塗り物代取りに行く(7/30)。勇吉が福岡へ塗物を持参する(11/2)。若者は室にて渋柿取りをする(10/17,18)。勇吉、鉄三が室の掃除をする(10/16)。勇吉室に入る(10/20)。勇吉、鉄三が漆くるめする(11/8,9)。鉄三は漆の実苦種す(11/10)。漆苗堀する(11/18)。漆の木植をする(11/19,20)。漆苗植する(11/21)。勇吉、鉄三は柿渋とりする(11/30)。松太郎は午前中は山■の川端へ漆木植をする(12/1)。勇吉は浄法寺へいく。松太郎は塗物を背負う(12/2)。室は勇吉、鉄三、猛(12/21)。猫塚三右衛門■視学■屋校長及び

佐藤浅沢校長来る。塗置室を視察する(12/22)。花輪の関正治へ汁椀売る(12/25)。

塗物は盛岡、福岡などへおさめている。花輪の関氏も売却先の一つである。渋柿は漆器の下地のためである。勇吉が漆・漆器関係の中心である。「漆くるめ」は漆液中の水分を蒸発させる作業のこと。漆の木、苗も植えている。

吉岡鉄工所より大椀ロクロを修繕して送られる(1/5)。木地挽金次郎来ル(4/9)。鉄三は木地山の木挽へいく(7/18)木地形椀廿下る(7/22)。肴代25銭クジナ付き70銭シオビキ1本(7/27)。室で勇吉・鉄三が汁椀の塗りをする(8/5)。木地形付する(8/8,9,10)。倉松が盛岡市の鉄工所へいく。木地器大小2つを修繕へ(8/26)。関沢の木地木引■々■材■員来る。末太郎、重三を連れて善助も立ち会う(8/29)。関浄山の木地用材昨年■ト伐跡検査に斎藤主査来る。末太郎・金次郎・重三が立ち会う(9/5)。金次郎の木地椀を鍛冶屋へもっていく(9/16)。金次郎来り形をマギへ上る(10/16)。午後、木地山へ牛に荷物をつけていく。形折3人が山へ上る(10/18)。喜代治は米味噌トウバを木地形山へ牛にて運ぶ(10/30)。酒屋の牛も刈りて関沢より木地形付す(11/5)。喜代治は牛にて木地山へ半味運搬する(11/10)。松太郎は木地山より牛にて木地付けに行く(11/15)。鉄五郎、松太郎は関沢の(木地)小屋へ行く(12/6,7)。木地山へいく。忠太郎より木地代5■90■送らる(12/6)。鉄五郎、松太郎、関沢の木地小屋に行く。木地形折二人は金次郎と山へ行く(12/17)。中佐井の坂へ汁椀木地をあげる(12/21)。中佐井の坂へ本椀木地300枚計900枚(12/24)。

登場回数から見て金次郎、重三の2人は木地関係の中心人物といえよう⁴⁾。木地山の小屋へ食料を運んで、そこで木地を取っているようだ。「木地形折」とは何か不明である。

【木材】

鉄五郎、鉄三は苗木の床造をする(4/15)。鉄三、ヤエが杉苗の仮植をする(4/17)。鉄三が楷苗の仮植床造りをする(4/19)。鉄三が楷苗の仮植をする(4/20)。晴山の境界へ屋根松を植え付ける(4/23)。大清水の某桐木調べ。85円の値がつく(11/16)。柿ノ木平の少鉄仁吉より桐代の残金■取(12/6)。鉄五郎は山へ杉木■■に行く(12/26)。

杉と檜が植林され、桐が金銭で取引されている。

【薪・炭】

牛は薪付す(8/3)。薪山の引き渡し(9/10)。晴山の炭木を畠山細蔵へ売る。手金50円(10/19)。関沢の炭釜へ行く(11/5)。鉄五郎、松太郎、炭木切する(12/8,9)。鉄五郎炭木切り(12/10)。鉄五郎、松太郎、炭釜へ行く(12/22)。下もの仁太郎薪の山の件で来る(12/30)。鉄五郎薪山へ行く(12/31)。

「牛は薪付す」の意味は不明である(薪運びであろうか)。

【稗】

鉄五郎 セツ ヤエ スエ 倉松 新道エス ヒエ刈(9/15)。稗折頼む(10/23)。稗折りする(10/22,25,26,27)。鉄五郎、辰治、佐太郎、三之助にて稗室の材木取りをする(11/22)。大工、少太郎、萬治による稗室の普請(11/23)。萬治、鉄五郎等は稗室へ出る(11/27)。鉄五郎、松太郎は稗室の手伝い(11/30)。鉄五郎は稗室へ。大工、少太郎、萬治へ稗室の作料を支払う(12/1)。

稗室については有賀(1967:155)に、稗の脱穀精白を行なうための村の共同経営による室とされている。少(小)太郎[8:別家格名子]や萬治へは料金を払っているので作業はテーマであろう。

【その他農業】

勇吉はクルミ取り(9/11)。金次郎、スイタケ取りする(10/17)。辰治、ヤエは大豆引きする(11/6)。若者共は大豆打する(11/8)。松太郎は牛にて末太郎の大豆付し(11/11)。鉄五郎は大豆そい(11/15)。鉄五郎、辰治大豆負い(11/16,17)。鉄五郎、長イモ植する(11/6)。

大豆は結構大事な作物のようである。その他、長芋も栽培し、クルミやしいたけは採集している。

【売り買い・物のやり取りなど(上記であげた以外)】

樺太の一次様からカズノコを送られる(7/13)。カムチャツカ行きのカニ取者が帰る(8/20)。カムチャツカ行きの土産を貰う(8/21)。勇吉は福岡へ大麦を買いにいく(9/1)。午後勇吉は大豆を買いに柿木平までいく(9/5)。「辰治ハ今朝娘ヲ花輪ノ石木田へ小■二貸シ連レ行ク」(9/12)。売薬行商人2人来て泊まる(10/9,12/23)。本夕樺太よりタエ来る(10/15)。酒屋の伊勢夫婦が樺太より帰り土産を持参する(10/17)。勇吉は青森行のイモ等を新町の村上運送へ持参する(10/29)。

樺太、カムチャツカともつきあいがあることが分かる。

【冠婚葬祭への出席】

昨夜中佐井の大屋の三郎死去。文一は夜詰にいく(12/11)。中佐井大屋の葬式、野辺送り。神式葬式。神主は小保内樺三郎と山保由文。松太郎は中佐井へ人足にいく(12/14)。中佐井へ墓参(12/15)。中佐井大屋の十日祭(七日)にいく(12/16)。岩木の与太郎の子どもが死去。善助妻がお悔やみに行く(12/10)。中佐井の幸吉の葬式へ野辺送りにいく。晩には文一が念仏にいく(12/26)。

三郎は、中佐井の大屋である。葬式は野辺送りなどの慣習によるものである。

新家の嫁取り(3/27)。文一が下もの石松の婿取りの客で行く(4/13)。下もの幸次郎が後妻を迎え、招かれる(5/6)。「文一ノ婚姻届本役場へ提出ス」(6/4)。

嫁取り・婿取りの宴席への出席である。文一の婚姻届けを役場へ提出したとあるが、文一の結婚式その他の記載が前後にみ

あたらぬ。また、この日記では文一の妻は「和子」となっているが、有賀(1967)では妻は「ハナ」となっている。その後離婚してハナと再婚した。

4. 1940(昭和15)年の日記から

4.1 登場人物・回数・場所・細目

登場人物は270人ほどであり、75人ほどが一回のみの登場、10人ほどが2回の登場である。なお、1930(昭和5)年に頻出の鉄五郎は145回→9回、金次郎121回→5回、重三103回→0回、辰治[35:中屋敷名子]81回→149回、鉄三77回→1回、勇吉76回→2回、文一69回→16回、松太郎[13:名子]68回→0回、末太郎[11:別家格名子]53回→1回、萬治52回→0回となっている。

漆器生産をやめたことにより、作業の細目として、漆器関係はほとんどなくなった。木地挽を担当していた重三の登場は0回となっており、おそらく他出したと考えられる。木地挽等中心的な役割を担っていた金次郎に関しては、稲扱などの作業に登場するが決して多くはない(5回)。田に加え、畑作業と畜産が主な作業となり、その中心的な役割を担うのが、名子の鉄五郎から、1940(昭和15)年では倉松(39回→51回)に代わり、更に辰治(81回→149回)となり、その後、佐一(40回)に移っている。

登場する場所は1930(昭和5)年と変わらない。

なお、長男の文一は、1939(昭和14)年11月から入院し、1940(昭和15)年5月30日に退院したという記述がある。そのためか日記への登場も多くはない(16回)。

4.2 具体的な事例

【作業の中心】

倉松馬飼(十二月分より一ヶ月拾五円与)。辰治今日より来る(2/9)。辰治堰普請に出て妻来り(2/16)。辰治に旧正月■手■代金貳拾壹円支払いする(3/11)。辰治自個の苗代ナラシス(5/3)。辰治は自分の仕事へ行く(5/18)。辰治自分の仕事する朝夕にくる(5/21)。辰治午前中自分の開墾地へ行く夕方来る(5/29)。辰治本日までの分手習代渡(8/9)。辰治今日より改む(8/10)。佐一来る(10/25以降11月中旬まで)。

家の作業について、倉松から辰治へ主たる担当が移り、さらに辰治も自分の仕事のためか、あまりこなくなる。10月に入って佐一が頻りに登場するようになり(11/22頃まで)、それは馬あつかい(10/15,16,17)やいもほり(10/20)と作業が分かる場合もあるが、多くは名前だけの記述で何の作業を担ったのか不明の場合が多い。

【田／稲作】

辰治 佐太郎妻 岩松妻 喜一 サキ ナツ等にて靱オシス(4/17)。辰治靱オシに手伝いす 靱オシ與兵衛 末太郎方佐太郎 保蔵 岩松 井戸端(4/18)。名子及び作子一同にて稲上げす(10/3)。今日は稲刈り辰治金次郎寅蔵三人(10/8)。文男稲かぜ(10/11

)。稲扱着手す拾人(11/28)。稲扱(11/29,30)、稲扱いは今日にて終す(12/9)。

1930(昭和5)年同様、稲作の記述は全般的に出てくるが多いというわけではない。4月当初は辰治が中心となっていたが、11月12月には辰治の名前はない。稲かぜ(ハセのことか)に、文男(四男14歳)が登場している。血縁者の農作業従事がほとんど見られない(妻コトは除く)ことを考えると珍しい記述である。

【畜産他】

倉松トナ切りする(1/28その他)。羊牝生る(2/29)。浅沢学校で放牧組合の総会有駒吉出席す(3/26)。安藤号より栗毛牡馬星・后二白生る(4/8)。辰治孫市にて種馬所種付検査二馬奉行(4/25)。玉山勘七羊の毛刈に来り(5/15)。孫市辰治は種馬所へ牝馬奉行(5/15,16,19)。辰治助櫻へ夕方種付す人工種付(5/18)。プリモースの雌鳥ヒヨコ九疋うまれかして草■より出る(6/9)。駒吉牧夫の講習に畑育成所へ行く(7/10)。大虎号の子二歳牡牛百五十六円■売りす(8/7)。倉松ブタ飼する(8/23)。倉松田代山より岩花号二歳を下げる(9/10)。倉松新町馬騷場二歳牝馬奉行(9/11)。子豚沼宮内より買う(11/18)。下々の姉へ子豚代十八円払う(11/20)。ヤギの牡を新町の津島へ貸す(12/5)。豚を五十七円で売る(12/13)。

1930(昭和5)年にくらべて目だつ生業面での記述の一つが「トナ切り」である。これは家畜の餌を切る作業である。この記述が多いことから畜産に力を入れているようにも思えるが、品評会への参加の記述は見あたらぬ、牛・馬の飼育数はそれなりにあると思うが、日記からは分からない。種付けには行っているが、この年に売った牛馬は牛1頭のみ(156円)である。牛馬のほか、豚や羊、ヤギ、プリモース(鶏)を飼っている。1930年にくらべて、畜産は「縮小」といった感が否めない。

【養蚕・桑】

辰治養蚕の柵カキス(6/2)。キヨ、コト桑取り(6/9)。キヨ・サノ桑トリス(6/12)。コト、キヨ、文男桑取り(6/15)。新町の仁田桑取りに来る(6/16)。仁太桑取り(6/19,20,21,22,23)。辰治、仁太桑取りス午後佐一も頼む(6/24)。辰治桑取りス(6/25)。養蚕の上蔭す(6/28)。辰治、仁田、佐一、猛、蚕付け(6/28)。養蚕上蔭済ます(6/29)。辰治、猛、佐一上蔭手伝い(6/29)。繭かきす(7/5,6)。辰治繭取へ、コト繭取へ、辰治倉松愷吉にて繭取りす(7/7)。佐一と蚕柵トリス(7/8)。コト糸取りす(7/9)。辰治マブシ付す(8/10,12,13)。辰治桑取りス(8/11)。夏秋蚕上蔭はじめる(8/14)。コトは浄法寺へ夏繭持参し午後五時帰る(8/23)。

1930(昭和5)年にくらべて、名子一同による作業は見られなくなったことから、規模は小さくなったと思われる。

【漆器・木地関係】

新町の大森市四郎様木地椀器所望に付小山田惣治様と来る(3

2)。岩屋の喜代松形折子ヨウナ済■来る (3/12)。新町の大森市四郎殿小山田喜惣治殿と来り木地挽器四台附属品共式百円也二譲り内金壹百円也受取る (3/15)。新町の大森様木地挽器四台及カナ及木地二俵持ち行く (3/16)。猛より盛岡勇吉行く柿洪代五円受取 (3/27)。大森市四郎殿より木地挽四台代金の残金受取済ス (全部にて二百五円也受取) 五円也ハ木地形代向二預ル (5/30)。猛漆立木調べす (6/29)。三浦仁志来りて漆立木百四十本の■代金四十五円也受取 (7/4)。漆器組合の事務所完成祝賀会アリ (8/24)。洪柿取りナツ辰ノ母キヨノ母新藤のアバ畝佐一 (10/17)。洪柿ちぶし猛鉄三喜代松 (10/18)。猛午後より柿洪一番コシス (11/24)。

漆器業は前年に停止した。そのため、漆器に関する記述は、漆木に関する記述、器材売買に関する記述であり、漆器の作業に関する記述はほとんどない。器材のほか、漆木も売ったようだ。しかし、柿洪を生成している様子もある。漆器組合の事務所完成祝賀会には参加しており、何らかの形で若干漆器生産に関わっていると思われる。

【木材】

浅沢小学校で新町営林署の植林の実地講習あり駒吉代理出席する (4/3)。助頼みて杉の皮取り (8/1,2)。森合の松の伐採延■として三十円を種市より受取又日陰畑のハンノ木を百円也で売る但し昨年の石神様の杉木代を返さぬことにする (11/22)。薪山の引き渡しに営林署より熊谷氏来る 和男金作猛益太郎の四人出る (7/31)。

営林署の実地研修などにも参加していることから、林業にはそれなりに力を入れている。販売する木の種類を組み合わせながら取り組んでいる様子が見られる。

【薪・炭】

名子一同して薪刈 (1/3)。名子及水車使用人■にて焼切より薪引ス (1/10)。名子一同にて薪刈ス二駄づつ刈りて負い来りハセにかけ (9/14)。小学校で入会薪山の相談あり駒吉行く (10/11)。名子一同して薪負い (11/26)。薪山の木分す (6/26)。

薪に関する作業は名子によるものである。炭の記述は全く出てこない。

【その他農業】

辰治妻孫市妻と二人にてミブヨモギ畑掘ス (4/30)。孫市妻辰治妻辰治宣吉ミブヨモギの移植す。松尾幸蔵ミブヨモギの植え付けに来る (5/15)。ミブヨモギ指導員松尾氏来り夕方帰る ヨモギ植 佐一、孫市妻、ヤエ、池之端、サワ、スワ、佐市方、マツエ、岩松妻、井戸端、助妻、喜一、甚兵衛、ナツ、春吉、辰治妻、辰治等、一反歩植え付けす (5/16)。ミブヨモギの草取り頼む六円也五人分 (7/18)。名子ミキ佐吉マツエ岩松妻ヨシ鉄三助 甚兵衛ナツ等にてミブヨモギ刈取る (8/21)。辰治倉松佐一にて夕方ミブヨモギの荷造りす (9/1)。今朝辰治倉松来てミブヨモギを新町まで運ぶ (9/4)。松尾吉哉殿ミブヨモギ

の相談に来り泊まる村人へ講話す (9/9)。松尾殿よりミブヨモギ代八十円三十二銭受取 (9/10)。

1930 (昭和5) 年にくらべての生業面のもう一つの特徴は、「ミブヨモギ」(回虫駆除薬) の生産である。だが80円32銭の代金はあまり高いものではないように思われる。

筍取り (6/5,6)。キヨ・サヨ蕨取りす (6/7)。今朝辰治を頼みて中佐井駅へ花輪行きの筍一吠わらび吠運ぶ (6/8)。辰治、フキ取り (6/19) 大豆の草取り三人頼む (7/3)。倉松とキヨはクルミ取り (9/13)。馬吉キノコ採り、キヨブドウ取り (9/21)。ひえうちヒエ・ソエ末蔵 喜一 千松 春吉 千太郎 兼松 甚太よハ アサエ 金次郎 男等ヒエソエ (10/22)。ヒエうち十一人 岩木ウタ 岩屋サガ タマ 鉄五郎 孫一 春松 末太郎 駒吉 マツエ 定吉 辰治 (10/23)。後ろの畑の大豆引きキヨ母 キヨ ナツ (11/6)。大豆打ちの残りす名子八人頼みて大根掘りす (11/11)。

大豆や稗は、畑作の中心的な作業であり、かなりの人数を使っている。山菜等採取も1930 (昭和5) 年同様におこなっている。

【生活の協力・冠婚葬祭への出席】

寅蔵、熊、甚太、喜一等にて屋根の雪落 (1/31)。辰治■■堰普請に出て妻来り (2/16)。屋根の雪落しに清松、兼松、宣吉、末蔵、佐太郎を頼む (2/28)。辰治は中佐井の金治方の普請へ行く (5/12)。

普請等の作業には、辰治が参加し、辰治がこられないときは、妻がきて作業を代行している。

名子一同してスス掃ス (2/4)。名子一同にて庭の草取りする (7/12)。今朝名子一同して掃除す 赤飯の馳走す (8/10)。村一同にて火の見やぐらの修復す 中飯の馳走す (9/1)。名子一同招きて庭済の馳走す会する者九十七人なり (12/10)。

1939 (昭和14) 年に大家族 (複合家族) は解体したとされているが (有賀1967:3)、名子のスケはこの年でも継続されている。漆器業は停止しても名子制度自体は継続している。12/10は稲扱い終了の翌日である。名子以外に村一同での作業にも馳走をしている。なお、ここには事例を出さなかったが、冠婚葬祭への出席はほとんどが妻コトの役目である。

【土地関係等】

市兵衛■畑を七百五十円で馬吉へ売 手金貳百■受取 (1/25)。名子達一同集めて役地田ノ交換及売買方論議ス (1/29)。金次郎孫市へ西田の畑売 (1/31)。孫太郎へ今晚宅地及畑を受返させる事を約束する旧小正月までに (2/1)。孫太郎へ宅地及畑を登記引渡駒吉を代理に遣す (2/27)。孫太郎の宅地及畑の登記引渡したるに依り煙草ニケ持参す (3/1)。駒吉を頼み馬吉兼松駒吉■土地登記す (3/18)。西田の田の分割測量に勝

馬田頼む (4/21)。名子■へ役地田一人役づつ登記す田代金を二回に受取る (12/24)。

この年、名子らへ無償貸与していた役地(ヤクス)を名子らに登記させ買い取らせようとしている(有賀1967:378)。これは大屋名子関係にとって大きな変化といえよう。他の土地も売却あるいは受返させている。上で名子制度は継続していると述べたが、徐々に崩壊しつつあるといえるだろう。

【有賀・渋沢らとのやりとり】

本日渋沢氏邸より石神村誌五冊送付相成る(2/4)。有賀先生より農村社会の研究一部送らる(3/18)。有賀先生本代四円送る農村社会の研究代(3/20)。渋沢氏より浅沢郷土史料二部贈呈さる(3/20)。東京帝大農学部農政学研究室川野重任氏姜鋌澤氏農業経済学教室御兩人渋沢氏の紹介状(名詞)持参し来り(3/28)。今日東京帝国大学農学部農業経済学研究古島敏雄氏早稲田大学助教授商学部研究室入交好修氏の両先生印刷教授以下十三名名子制度調査研究のため来宅し数時間調査して帰る(7/13)。畑学校の先生名子制度調査立ち寄る(7/14)。早稲田大学商学部研究会より菓子小包送らる(7/25)。有賀先生故源八先生墓参りす(11/13)。有賀先生午後1時ご出立(11/14)。

この年は石神モノグラフが発刊されたこともあり、有賀や渋沢との手紙のやりとりも多く、11月には有賀が来訪している。日記の受信・発信欄を整理すると以下のようである。

受信：有賀(1/25,2/15,16,3/10,17,8/12,11/12,12/2)、アチックミュージアム(2/15)、川野重任(4/5,10)、姜鋌澤(4/20)。

発信：有賀(1/20,3/11,18,22,5/3,7/22,12/3,22)、渋沢敬三(3/22,7/22)、川野(4/11)、早稲田大学(7/25,26)。

【戦時体制下の暮らし】

コトは新町の亀五郎殿方へ入営兵の餞別持参す(一円、鶏一羽、ソーメン)(2/5)。土沢の応召兵弥市除隊挨拶に来る(2/16)。応召兵小山田敬三君の送別会(2/28)。村一同集りて開墾地の件につき協議す(6/4)。ハナは国防婦人会の結成式へ出席す(8/15)。警防団の訓練始まる(9/4)。佐一産業組合より配給品受け取りに行く(11/4)。愛国婦人会の石神婦人常会の発開式挙行す会員の心得、貯蓄及節米につき講演す(12/26)。

戦時体制に入り、開墾地の問題、警防団での訓練や国防・愛国婦人会の結成、応召兵、配給、節米運動の話題などが登場しており興味深い。

5. まとめと今後の課題

漆器、木地挽などが重視されていることが1930(昭和5)年の日記からはうかがえた。多くの人を使っており、関係各所からの視察などもあった。その他、養蚕、馬産関係の記述も多い。特に、馬産については、我々が齋藤家の現当主から閲覧を許された多くの資料の中にも、多くの記述がみられ、有賀のモノグラフにおいて、漆器および馬産の記述が少ないのは、どのような意図によるものなのか、気になるところである。

それ以外に、養鶏、養魚にも手を出している。有賀の調査した1935(昭和10)年には漆器業が不振であったと記されており、多角経営を考えていた意向がうかがえる。

齋藤家は1939(昭和14)年には漆器業を停止したため、1940(昭和15)年の日記には器材譲渡の記述が見られ、漆器業からは手を引いたことが分かる。このようななか、担当する人物が交替し、畑作に山菜や畜産等、さまざまな資源を組み合わせながら経営を成り立たせている様子が見て取れる。そうしたなか、戦時体制に入っていく過程での応召兵に対する餞別を見るに、地域における齋藤家の立ち位置を模索している様子もうかがえる。有賀は、名子制度が崩壊しつつある昭和15年頃から農地改革終了の時期までが、大屋にとって「この家の始まって以来の最も苦しい時期であった」(有賀1967:382)と捉えている。その内実の一端——漆器業を停止し、多角的な経営を模索し、ミブヨモギなどを栽培するも畜産は縮小していき役地を売却するような状況——が、日記から肉付けされ、齋藤家の経営の多様性と地域における立場をうかがうことができる。

この日記を導きの糸とし、他の年次の日記の内容と、日記以外の史資料——たとえば漆器や馬の記録、人足の記録、大福帳——とを踏まえて分析していくことが、今後の課題である。

付記・謝辞

日記を閲覧させていただいた齋藤傑氏に感謝申し上げます。本稿は岩手県立大学全学競争研究費およびJSPS科研費18K01987による研究成果の一部である。

注

- (1)「辰治来る」などのみ書いていて辰治が何をしたかを書いていない場合は、細目での集計はしていない。そのため、集計の数値よりは、現実には多くその作業に関わっていることも考えられる。
- (2) 漆器関係には、木地や渋柿、漆木のことも含めている。ただし木地挽は独立して細目にした。
- (3) 本稿では有賀(1967)の家番号を[]であらわす。
- (4) 有賀(1967:52)では重三27歳(1934年時点)が木地挽とされている。

文献

- 有賀喜左衛門, 1967, 『有賀喜左衛門著作集 III 大家族制度と名子制度』未来社
- 佐藤利明, 2019, 「昭和三一年「農事日誌」にみる農家の生産と生活」『東北民俗』53: 69-78.
- 高田知和, 2007, 「1945(昭和20)年・農村の日常生活世界——農村青年の日記を読む(1)——」『応用社会学研究』17: 17-48.
- 細谷昂, 2019, 『小作農民の歴史社会学』御茶の水書房.